



一筆書きの道

八坂 里四

今春、四国遍路の旅をした。八八カ所の寺を巡り歩くには、時計回りの順打ちと、時計の針と逆方向に巡る逆打ちのふたつの歩き方がある。逆打ちは順打ちよりも困難が一層増すだけに御利益も多いそうだ。

一般的な順打ちで歩いた。徳島県鳴門市の一番札所霊山寺を皮切りに香川県長尾町の八十八番札所大窪寺まで、四国をぐるりとひと筆書きのように巡り歩くのである。

.....

ひと筆書きとは言っても、道が重なる箇所もある。高知巡礼の締めくくりは、三十六番青龍寺から三十七番岩本寺までが五五km、次の三十八番金剛福寺へは九〇km弱、高知最後の札所三十九番延光寺には六〇km弱と、札所と札所の間はたつぷりと距離があり、土佐高知が修行の道場と言われるのもうなずける。

ここで足摺岬先端にある金剛福寺から次の延光寺に向かう時に二五kmほど歩いてきた道に戻ることになる。

この道筋を足摺岬に向かっていると、金剛福寺を打ち終えた遍路が戻って来る。「ご苦労さんです」と挨拶を交わす。山登りで登る人と下りる人が交わす挨拶と似ているが、同じではない。山では登りの人が下りる人に追い付くことはほとんどないが、八十八カ所巡りは長い道中なので後になったり先になったりして歩く。そして金剛福寺が山頂のような目的地でもない。

.....

歩き始めて二〇日も経つと、顔見知りも増えてくる。打ち戻って来る遍路の中に見知った顔がある。脚が速くてとうに愛媛に入っていると思っていた人が来たり、足を引ぎずっていた人にいつの間にか追い越されていたりして、互いに



徒然
つれづれ



「あらあら」と驚きの声をあげる。この人たちは、つい立ち止まって、「ご苦労さん」の声を掛け、「今日の宿はどこですか」とか一言付け加えたりする。

金剛福寺まで一八kmほど距離を残した海辺の町に宿をとった。翌朝、お握り、お茶の他、参拝に必要な物だけを持ち、他は宿に預かって貰うことにし、明けやらぬ道を足摺岬に向かう。金剛福寺を打ち終える。室戸岬から海岸沿いの道を足摺岬まで一〇日を要した。その間「足摺へは遠いなあ」とは一度も思わずに歩いたが、打ち終えてみるとやはり感慨深いものがあつた。

.....
同じ道に戻る。ひと筆書きのような、優に千kmを超える四国を巡る道中に、わずか二五kmほどの同じ道である。

打ち戻りの道は、歩き遍路の疲れを癒し、元気付けるために、お大師様が用意

されたご褒美のようである。同じ道なので、遍路に付き物の道を間違ふ心配もなく、行き交う顔見知りの人に出会って元気を貰う道である。

.....
四国最南端の足摺岬の金剛福寺からは、ずっと左に見てきた土佐の海を今度は右手に見て歩く。その海も見えなくなったら打ち戻りの道も終わる。そして高知も札所をひとつ残すだけになり、遍路の旅もほぼ半分を終えたことになる。
足摺岬から打ち戻りの道は北上する訳だが、北海道の人間のせいかな、この北に向かっている実感が旅の半ばを終えたこの思いを一層強くさせた。

.....
足摺に向かう遍路に出会う。挨拶を交わす。声を掛ける。自分の声に、向かう時とは違う力が加わったように思えた。